

援助職のリカバリー

《28》

～「夫が、若年性認知症になった」(1)～

袴田 洋子

達夫のマンションを出たあと、近所のスーパーで買い物をして、香が自宅に戻ったのは、18時を過ぎた頃だった。

「おかえり。お米、炊いておいたよ」

一人娘の真衣に、あらかじめLINEで頼んでいたため、帰宅後、すぐに夕飯にすることができた。今夜は餃子。スーパーの隣にある「餃子の王将」で買ってきたものだ。達夫と会う前には、食べるのを何となく控えているメニューのひとつになっていることもあり、ビールと一緒に食べる餃子は、いっそう美味しく感じる。

缶ビールをグラスに注ぎながら、達夫との時間をぼんやり思い出しかかったところで、はっと我に帰り、「自分の家」に意識を集中した。恋愛を継続している自分を褒めたい感情と、娘と夫に永遠に言えない秘密を保持しているうしろめたい感情。ただ、もう25年も続いている「日常」なので、それらの感情の取り扱いには慣れている。今は、自分の家に集中する時間。達夫に、次に会う日まで、明日からまた自分の中の「女」を手入れしていくのだ。平穏な生活を平穏のまま続けていくためのエネルギーを蓄えるために、恋愛をしているような気もする。実際には、エネルギーを消費しているのかもしれないが、どっちでも関係ない。25年続いているシステムがうまく回っているのだから、続けていけばいい。

アルコールで少しゆるんだ気持ちになったところで、一口に餃子を頬張った真衣が言った。

「お父さん、なんか最近、へんな気がする」

「へん、って、何が？」

「お店の佐々木さんが、このあいだ、お父さん、最近、ミスが多くて困ってる、って言ってたから、お父さんに、ちゃんと仕事しなきゃダメじゃんって冗談で言ったら、逆ギレしちゃって。ちょっとビビったから、それ以上、何も言わなかったけど」

香の夫・信二は、香より9歳年上の59歳。もともとは、香が新卒で就職した職場の先輩だったが、家業の仏具屋を継ぐため、30代半ばで退職した。物静かで誠実な印象を与える信二は、親から任された仏具屋を順調に経営してきた。その穏やかで柔和な口調の信二が、逆ギレしたとは。香は、真衣の話をすぐにはイメージできなかった。これまで、信二が声を荒げたことなど一度もない。男性の更年期障害というのも、最近では注目されているみたいだから、そんな感じなのだろうか。しかし、店の従業員の佐々木くんが、真衣にボヤいたのは、ちょっと気にかかる。香は、翌日、店に出ることになっていたため、佐々木に聞いてみることにした。

佐々木から話を聞いた香は、驚きとともに不安な気持ちが湧いて出るのが、はっきりとわかった。線香やローソクを定期的買いにくる馴染みの客の顔がわからなかったこと、仏壇の大きさを間違えて発注して、客から苦情を受けたこと、納品先の客の家にたどり着かず、佐々木に電話がかかかってきて、慌てて迎えに行ったことなど、この数ヶ月のあいだに起こったという話は、どれも認知症の人の症状として、香が薬局で聞いたことのあるものだった。

夫はまだ59歳。一般的な会社では、定年に近い年齢だが、体はまだまだ元気だ。店が終わってから、週に3日は、ウォーキングにも行っている。臍負目なしに、健康には、比較的気を使っている方だと思う。ただ、飲酒量は多めかもしれないけれど。でも、問題飲酒的な量ではない。晩酌で酔っても、上機嫌になっているだけだ。

調剤薬局の薬剤師としてのパート勤務もしている香は、認知症の患者への処方もちろん行っているのだから、ある程度の知識を持っている。隣接している開業医の院長と、認知症の患者のことで話をしたこともあるので、特別に詳しいわけではないけれど、だいたいことは、知っていると思う。それらのすべての情報を整理した上で、夫は認知症かもしれないと思った。高齢の人がなるの

ではない、若年性認知症というものだ。が、高齢の人の認知症と、何がどう違うのか？

香は、次から次へと出てくる疑問や不安に自問自答しながら、確実に言えることが一つだけあるのがわかった。信二が若年性認知症だったら、今後、仕事を続けられないかもしれない。経済的に大きな打撃を受けるということだ。真衣は、まだ16歳。学費もこれからが一番かかる。だから、自分が薬局でパート勤務を始めたのだ。香は、指先が冷たくなっていくのを感じながら、納品に出かけた信二が帰ってくるのを待った。

17時を過ぎた頃、戻ってきた信二に、香は、佐々木から聞いた話を質問した。専門職である香は、このような場面で、本人の自尊心を傷つけない言い方を知っているし、なんとか出来るだろうと思っていたが、「身内」には、うまく行かないということがわかった。

「自分は認知症なんかじゃない！」と怒る信二に、受診しようと言ったが、「そんな必要ない！」と言われて、言葉にできるものが無くなった。信二が戻ってくる前に、佐々木に早く帰ってもらう判断をしたことは、本当によかった。が、これから、どうしたらいいのだろうか。不安とショックで、脳みそが起動していないように感じられた。

店を閉め、二人で自宅に戻るあいだ、信二は何も喋らなかつた。香も何を言っても拒否的な言動をする信二に対し、話をする気になれなかつた。背後から、「お父さん、お母さん！」と声がして、振り返ると真衣が自転車から降りて、走ってきた。「アニメ部のミキちゃんちに行つて、DVD観て、マンガ借りて来た」と言いながら、一緒に観た映画の話を早口で話し始めた。信二は、真衣の話を理解しているのかどうか、微妙な雰囲気ながらも、うんうんと聞いていた。香は、明日、クリニックの開業医に相談することを決めた。